

課題発見ゼミへの期待 内藤クラス

1)

かねてより地域ごとの文化の違いやその伝播の過程に関心があった。食はその文化を分かりやすく示す一つの指標だ。文化に対する意欲を活かして主体性を持って活動に取り組み、その過程で論理的思考力や他者との合意形成能力をより伸ばしたい。

→地域ごとの食文化の違いは、現在は観光資源やアイデンティティの媒体として展開しています。21世紀において文化が果たす役割や可能性について考えるきっかけになれば良いと思います。

2)

私が選択したいクラスは、内藤先生のクラスである。その理由は、目標として書かれている「実際に地域社会に飛び込んで地域が抱えている問題に対するフィールドワークやボランティア活動」が、まさに自分が将来したいことと強く関連があるからである。地域の課題は校舎の中で本や新聞、インターネットと向き合っても全然見えてこない。実際にその地まで足を運び、住民の方たちの話を聞き、自分の目で見て解決や支援に努めたい。そして2つ目に、グループワークが多くあることである。私はグループ内で積極的に発言したり、行動したりすることが苦手だ。したがって、このゼミを通して、グループでの自分の役割を考えてプレゼンテーション等に向けてしっかりと取り組んでいきたい。

→現場を見ることは非常に重要です。ただ、今回のプレゼンでもわかるように、ただ現場に飛び込んでも何も見えてきません。現場で何かを見出す際に重要な「視点」や方法論を学び、そのうえでフィールドワークに行こうと思います。グループワークは構えずに、気楽にやってください。

3)

私は今の徳島が多くの問題を抱えていることを知り、どうにかしたいと考えている。過疎化や少子高齢化が進んでおり、地域社会の衰退がみられる。その中で自分にできることはないかと考えており、このクラスがぴったりだと感じた。実際に地域の方々と交流したり、フィールドワークを通して徳島の魅力や問題を再発見したいからだ。また徳島がこれから直面する南海地震について真剣に考えるいい機会でもある。前もって考えておくことで少しでも最悪の出来事を避けることができるかもしれない。私はこの徳島のために役に立ちたいと考えており、自分も知らない徳島のことを知りたい。

→今回は災害を直接のテーマにはしません。というのもシラバスを書いたあとで、食に関わるプロジェクトを民間企業とおこなうことになったからです。ただ、ガイダンスで紹介したように、食を通じて災害について考えることは十分に可能です。食を通じて見ることで、防災や地域づくりをめぐる具体的な課題が見えてくることもあると思います。そのうえで、フィールドに出てみましょう。

4)

少子高齢化が進みお年寄りが増えている現代において、地域社会に直接飛び込んで行うフィールドワークやボランティア活動の重要性は高まっているように感じる。内藤先生の授業ではフィールドワークの基礎から学ぶことができ、実際に活動を体験することもできるので良いと思う。

→食という切り口は、人間の本質に関わっているので、対象を自由に設定して、いろいろな部分を見ることができると思います。食を通じて、過疎化や少子高齢化社会のあり方やそこでの社会問題について学び、考えることもできると思います。

5)

私は内藤さんの授業を第一候補にした。このクラス以外もとても興味があった。選択の決め手のなったのは、フィールドワークがあることだ。

将来、私は徳島県西部の地域活性化をしたいと思い大学で学ぼうと決めた。活動する場所や内容が違って、地域の人たちと一緒に同じ目線になって活動していくことは、いざ自分がすることになった時、その経験を生かすことができる。フィールドワークがあるクラスは他のクラスと違い、より積極的に授業に取り組むことができ

る。ただ発言するだけでなく、発言しそれを行動に移していく流れが身につく。私は、物事を計画し実行するという流れが得意ではない。思い立ったら行動してしまうこともよくある。

だから、フィールドワークを通し仲間と協力することで自分の行動に責任感を持つことができ、町おこし事業をする際に必要となる計画性と実行力を身につけることができる。この授業を受け、これからの自分の活動に生かしたい。

→フィールドワークに行くことも大事ですが、フィールドワークに行くための学問的な準備過程を学ぶことも重要です。学んで、調査に行き、考える。考えたいことは、君たちの自由に設定してもらえば良いですが、そのことを、みんなが「考える価値があるもの」にしていくための方法を学びましょう。

6)

内藤先生の授業を選択した理由は、「物事を感情論ではなく、社会科学的な思考法で思考すること」という到達目標に惹かれたからである。

毎回、自分の意見を伝えるとき、感情論にならないよう心がけているが、基礎的な思考法や方法論から学び習得する必要性を感じていた。これらは、自力で習得するのは難しいと感じていたが、授業の一環としてフィールドワークやボランティア活動を織り交ぜこのスキルを身につけられるこのゼミは、今の自分にとって一番必要としているものではないかと考えた。

→「個人的な関心」を「社会的な関心」に高める時に役立つ考え方や方法を学ぶことが大学というところだと思っています。現場で自分の関心を「発見」し、それを深めていってください。

7)

私は内藤先生のゼミを受講しようと考えている。一つの大きな理由としては罫猟の免許をとるプログラムがあるからである。

徳島県の近年狩猟免許交付状況が年々低下している、さらに平成 27 年度には 60 歳以上が 7 割を占めており野生鳥獣の被害の増加が恐れられている。(徳島県 HP、平成 29 年度狩猟免許試験の実施について、<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2016051800122/>)

このゼミを受講し、狩猟免許を取得することで野菜や果物などの害獣被害を少しながらも抑えることができる、さらに狩猟の魅力を受講した自分たちが発信していくことで若い年代の狩猟者が増え徳島県全域の害獣被害を抑えていきたい。

→鳥獣害問題や狩猟に関しては、いま研究室にそれを研究テーマにしている院生もいます。TA としてはいつでももらいますから、その人からも学べるところがあるでしょう。

8)

食べること・食べ物に興味があるのはもちろんだが、食を「通して」という言葉にひかれた。食べるということは国が違ってても必要なことだ。食を通していろんな県の人と触れ合ったり、日本国内だけではなく海外の人とも関りを持ってみたい。そのため、内藤先生のゼミに入り、まず徳島の食、徳島の食を学びそれを県外の人や海外の人にも伝えていきたい。

→「通じて」というポイントに反応してくれて嬉しく思います。そう、そこがポイントです。「食」は、社会現象をアカデミックな観点で捉える際の、ひとつの切り口です。そこから想像力をひろげて、自分の好きな対象や問題に繋げてください。

9)

私は内藤先生のゼミを希望する。私は地域について知り、学びたいので郷土料理について研究したい。郷土料理にはその地域の文化が反映されて、歴史のあるものなので調べるうちに料理以外にも様々なことがわかると思う。そういう理由で私は研究したい。文献や地元の人に話を聞いて料理を通して地域文化について深めたいです。

→徳島の郷土料理については、今年度に登録された徳島県西部における在来農業の日本農業遺産化に関わっていたので、そこそこ知ってはいます。そば米とかは、ソバのとでもユニークな調理法ですよ。それ以外にも、ゴウシュウイモや雑穀等の在来の農産物がいくつかあります。

10)

私の生まれは徳島であり、沿岸部に住んでいる。それ故に南海トラフ巨大地震の可能性についてはよく知っていたつもりであった。しかし、東北地方太平洋沖地震発生による津波が家屋を飲み込む映像を見たことによって、改めて天災の恐ろしさについて深く考えた。

震災前はじっくりと見たこともなかったハザードマップを確認した際、震災前後に作られたものを比較した。すると、震災前のものでは浸水しないとされていた地点が震災後のものでは浸水すると予想されていた。

また、周囲を見回してみると震災前には殆どなかった「津波浸水予測水位」のパネルを家の至る所で見ようになり、以前からパネルがついていた箇所の予測水位も高くなっており、場所によっては2メートルを超えると予想される箇所もあった。

この予測を上回る被害が発生する可能性もあり、行政そのものは停止し支援が滞る可能性もある。そうなれば、支援が開始するまで地域住民が団結し対処する必要があるだろう。このゼミを受けることによって、今後地震が発生する可能性の高い南海地震だけに限らず、災害に対応するための方法を身につけられると思ったため。

→「災害」と「食」の共通点は、どちらも自然の側面と文化・社会的な側面があるからです。今年は食をメインにしますが、あくまで「切り口」ですから、そこから災害に繋げていけば良いと思います。私自身は、アフリカでは難民キャンプにおける食料援助の問題を研究しています。ちなみに県南部の防災においても、避難食のストックや管理の問題は重要です。

11)

教室での講義を通じて知識をつけることはできますが、体験して感じることはできません。私は知識をつける事と同じくらい体験することが大切だと思います。だからフィールドワークが多い授業を選択したいと考えます。また、生きるために必要不可欠な食は誰にとっても身近なものなのでとても考えやすく、改めて様々なことを考え直すいい機会になるのではないかと期待しています。

→私たちは、そこらへんにいる、このありふれた人間を科学するのです。食という身近な切り口から、社会問題や人間存在について考える機会になれば良いと思います。

12)

私がjを選択する理由は、大学で学びたいと思っていた地域の問題に触れることができるからです。例えば、過疎や町おこしについてです。このゼミでは「食」からアプローチすることでその地域にしかないの特色を活かしていきたいです。また、実際に訪れることでわかることがあるはずで、それを感じてみたいです。そして調査して発表することではじめて社会に役立つのでそこも大事にしていきたいです。

→郷土料理などは、近年では「観光資源」として位置づけられ、それまでとは別様の意味をもつことがあります。20世紀以降に文化は死んだと考えられたところもありますが、20世紀後半以降に起こっている様々な現象を見ると、むしろこれほど文化が問題になることはこれまで無かったと言えるほどです。文化の観光資源化はその一例です。今回はJR四国と組んで、新たな文化観光資源を開発するプロジェクトを課題発見ゼミと連動させる予定です。その意味では、関心にはあうと思います。

13)

私はまだはっきりとは決まってないが、内藤先生のゼミを受講したいと考えている。選んだ理由は、「食」をテーマに自然と文化の接点や食とアイデンティティなど食を通して様々なことについて考えることに興味を持ったからである。また、フィールドワークを行い調査をするということでコミュニケーション能力を培うことができるのではないかと期待している。今まであまり食についてや食を通して考えるということがなかったので、視野が広がり、新たな視点で物事を見たり考えたりできるようになるのではないかと期待している。

→忘れがちですが、まず人間は「生き物」であり、そのうえで「文化・社会的存在」でもあります。「食」という切り口は、そうした人間の両側面をバランス良く見るための、きっかけになるかとお思います。人間は身近な存在です(自分がそうなのだから)。人間の科学(=文系)は、身近なことから、大木なことを考えるところがポイントだと思います。

14)

私が内藤先生のクラスを希望する理由は3つあります。

1つめの理由は、幅広い視野から総合的に社会の課題を把握する能力が身につけられると考えたからです。食を通して、人間の社会、文化、歴史、経済など色々な角度から見られるため、物事を多面的に考えられると思います。

2つめの理由は、主体性や協調性が身につけられると考えるからです。受講生の関心をもとにグループ編成をし、研究テーマを自分たちでグループで活動するので、一緒に問題解決に向かっていく中で、そのような能力が培われるのではないかと考えました。

3つめの理由は、フィールドワークを行うことで、座学では学べないような新しい発見ができると考えたからです。

これらの理由から私は内藤先生のクラスで学びたいと考えました。

→せっかく総合科学部に来たのだし、ひとつの対象をさまざまな視点で見ることにトライしてみると良いかもしれません。そのためには、研究対象・視点・方法論をキッチリ分けて考えられるようになることが重要だと思います（べつに総合科学部じゃなくても）。

→今回はたまたま「食」という切り口を示しましたが、そこから自由に対象を設定してもらえば良いです。その際、グループ研究をおこなうので、みなさんと相談しながらすすめてください。私はTAがサポートします。フィールドワークには必ず行くので、お楽しみに。

15)

この講座では食について扱う。食をめぐる問題には、貧困地域で食糧不足が起こっている一方、裕福な地域では多くの食べ物を無駄にしているというような食の格差問題、また家庭での個食や孤食といった問題がある。この講座を受けることで、食という分野から社会問題について考えることができる。

また、食は地域の文化や歴史を反映している。そのため、食を通じた、地域創生や地方活性化について学びたい。

→今回は「食」を通じて、さまざまな社会現象を捉え、把握する経験を積む機会になれば良いと思います。食を通じて何を見たいのか、何が見れるのかについて想像力を膨らませておいてください。

16)

フィールドワークをすることにより新たな知識を得たり、経験したりするためだ。私の受けている講義は、座学であり、使用するのは自分の頭だけだ。だから、ただ頭に入れたり、ディスカッションをしたり、イメージしただけで、実際に経験を通して、新たな問題点や視点を発見することがない。そして、想定外なことが起こったりすると、対応できな。それに加え、卒業論文を書く時にはただ文献を調べたりするだけでは不十分であり、フィールドワークが必要になるのではないだろうか。実際に現地に行き行動してみて、文献との考え方の違いや文献の意図していることが分かったりする。しかし、フィールドワークが座学や文献よりも良いとは言えない。座学で学んでみないと、基礎知識が無く、現地では何が当たり前で、どこが問題なのか分からないことがある。文献で調べなければ、前者と同じようなことを引き起こし、行動することによる知識のより深い理解が出来ない。先に既存の知識があつてこそ、フィールドワークをすることに意義がある。知識の理解度をより高められる。しかし、1年生は基本的に座学だ。まずは2年生に上がるまでに既存の知識を習得しなければならない。だが、知識だけを詰め込むよりも実践を通して知識を得た方が良い。理系の実験が前に述べた例だ。教科書を読むだけではなく、実験を通して、知識を得ている。だから、フィールドワークを通して、既存の知識をより深く理解させ、物事を幅広く捉えられるようにしたい。実際に行動に移すことでの問題にぶつかり、それを解決させていくプロセスを得たい。そうした能力が不足している為に柔軟な対応が出来ず、マニュアル人間になってしまう。そのために、フィールドワークの講義をとりたい。

→その通りです。研究の理論・視点・方法論を学ぶことなくしてフィールドに出ても、恐らく何も得ることができないでしょう。それは、私たちが日常生活を過ごしている時に、ほとんど「発見」が無いと同様です。逆に、適切な理論や視点を学べば、そうした日常生活の中からも「発見」があるかもしれません。

17)

私の普段の学習ではインターネットや書籍で調べるものがほとんどであり、実際体を動かして体験するという

学習が無いから、内藤先生のクラスを選べばフィールドワークやボランティア活動により現場に行き肌で感じるという学習ができるからである。また、グループでのフィールドワークにより今の自分に欠けているコミュニケーション能力や協調性を鍛えることができる。さらに地域社会で活動することで学生ばかりとの関係だけでなく、地域の人たちと意見や体験を共有し自分のつながりを広げることができることを期待している。

→今回は民間企業とコラボして観光商品（旅行プラン）を作るプロジェクトも、この授業で走らせようと思います。地域の方・民間企業・大都市の住民等、さまざまな人々とふれあいながら、現場の「問題」やその解決法について実践的に考える機会になれば良いと思います。

18)

私は内藤先生の食についてのゼミを選択したいと感じた。その理由は、食についての視野を広げておくことが重要であると感じているからだ。現在、世界の人口は増え続けており、近い将来には食糧危機が訪れることが予測されている。また、地球温暖化などの影響を受け、食材の不漁が続くなどといった問題もある。そのため、近年では日本でも新たな食材の養殖や流通が盛んになってきた。例としては、近畿大学が行っているナマズを養殖し、一般家庭の食卓に並べようという研究がある。この研究で生まれたナマズは既に大手スーパーの店頭にも並べられている。

では、養殖ではなく、天然のナマズを美味しく食べられる方法はないのだろうか。不漁に伴い高価になっていくウナギに代わり、天然のナマズを獲って、美味しく食べられる方法を見つけられれば、上記のような問題に直面した際に役立つのではないかと考える。

以上の理由から内藤先生の食についてのゼミを選択したいと感じた。

→アフリカに行くと、食料生産の問題を差し迫った危機として感じることはできるのですが、日本ではそうも行かないですね。水耕栽培やら工場生産の野菜なども注目されていますが、この野菜が口に入るために、いったい何ジュールのエネルギーが使われているのかと思うとゾッとすることがあります。さて、私は天然ナマズがアホほどとれる産卵場を知っています（秘密）。水産物を商品化する際の問題は、資源の枯渇です。淡水の（海に比べると）限られた生態系のなかで日常的にナマズを漁獲・集荷するとかなり早い段階で枯渇すると思います。では、ウナギやナマズの養殖が良いかといえば、それも完全な解決では無いかも知れません。というのも、養殖魚の餌になる小魚の資源が減っているからです。要は、問題を先送りしているのですね。

ただ、ナマズの話は、これまで「資源」として考えられてこなかったものを「資源」にする試みという点では面白いですね。いわゆる「未利用魚」の有効活用にもつれた取り組みの一貫ですね。ちなみに、あるモノが「資源」になるかどうかは、社会・文化的に決まる部分があります。たとえば石油は、ガソリンエンジンの発明以前は資源では無かったでしょうし、ブタは我々には食糧資源ですが、イスラームの方々にはそうではないでしょう。

19)

私は、今まで心理学が学びたくて、この徳島大学に入学してきたが、最近、将来は情報を発信していく仕事に就きたいという明確な目標ができたが、これまで偏った自分の学びたい分野ばかりを学んできた私にとって、今必要なのは、自分の持つ知識の幅を増やし、将来多くの情報を効果的に正しく伝える準備を行うことである。そこで、これまで海外のことばかりに興味を示し、海外志向であったので地域に密着した分野のことを学び、情報を発信していくことを学ぶことが必要だと気付いた。このクラスでは、食ということを通して地域に密着したことが学べ、また考えたり話し合ったりというよりは多くの体験ができ、自分の経験値がたくさん積めるというところに魅力を感じた。

また、狩ガールの企画にも参加したいと考えている。

→心理学にせよ、海外の出来事にせよ、いろいろなことに興味を持つのは良いことだと思います。今回は「食」をフィルターにするだけで、それを通して見たい現象を自由に見てみれば良いと思います。実際にものを見るときもそうですが、ただ両目で見るよりも、ときには片目で、かつ、手指で輪っかを作り双眼鏡のようにして、それを通して見た方が、ある対象がよく見えるということもあります。要は、焦点をあてるということです。

狩ガール、興味をもってくれたのであれば、ぜひ話をしに来てください！期待しています！なお、男子禁制では全然無いです（私のゼミも当然ながら女子だけでは無いです）。

20)

私たちは、毎日「食べる」という行為をしている。そしてその行為を通して「食」というものに向き合っている。クラスの中で一番身近な話題であり、ただ食べるということだけでなく「食」による文化の違い、そして食べるという行為が当たり前ではない地域も世界にはあるのだということをしりたいからである。「食」を通してひいてはその地域全体のことを知ることをできればということを期待している。

→人間の科学（≒文系）は、私たち人間というこのあたりまえの存在について理解を深めていくのでしょうか。当たり前を、当たり前そのままにしておいても、何の発見も生まれません。いくつかの当たり前が、当たり前ではないことに気付くことを「異化」といいます。当たり前を「異化」する訓練として、みなさんに一番身近な当り前の「食」をテーマにしてみました。

21)

私は、日常生活における学生の間での格差を減らすために、このクラスを選択した。私事であるが私にとって、食というものは生きていくうえで睡眠と同じくらい大切である。しかし、下宿生の友人に話を聞くと、食事を抜くことが当たり前であると言った。私は実家生であるため、食べるのが当たり前となっているが、下宿生にとっては勉強やバイトが忙しいから作ったり食べたりする時間がない、食べるくらいなら寝るという考えが強い。食事と睡眠も両立できるようにすればいいのにと感じてしまうが、簡単にできることではない。私にとっての当たり前が立場の異なる人にとっては難しいことがあり、考え方に大きな差が生まれる。実際、食事をとる学生ととらない学生の間では生活習慣の乱れだけではなく、成績や学生生活での格差が生まれつつある。このような格差を減らすことのできる考えを課題発見ゼミナールを通して見つけたい。

→食には **survive**（生存）と **well-being**（よく生きる）の二側面があります。君があげていた例は、何を・どのくらい食べるかという問題であるでしょうし、誰と・どのように食べるかという問題でもあると思います。まずは、どちらの問題として捉えたら、（自分にとって）いいのか考えてみるのもいいでしょう。そのうえで、それと社会的排除/包摂の問題がどう関わっているのか考えることは、思考を拓けるいい筋道のひとつだと思います。

22)

私がこのクラスを選択した理由は、前期のある講義の一環で県のボランティア活動に身を置いている中で現地に赴き同じ視点で交流することに興味を持ったからである。その上でこのクラスの座学では学べない現地で課題を発見し向き合うという形式に惹かれ、私自身自主的な学習に意欲を持ったからである。

→もちろんフィールドワークには行くし、地域貢献や社会的事業をおこなうこともあると思います。が、その前に、わりとたくさん本を読むと思います。ただ行って解決するのであれば、大学なんて来なくて良いじゃないですか？大学で学ぶ知識やスキルが、現実の問題を理解し解決するためにどのように役立つのか、この授業で経験してもらえればと思います。

23)

私は内藤ゼミを選択したいと考えています。食は自然と文化の側面を持っており、授業で言っていたように総合的な視点を育てるいい素材だと思ったからです。総合的な視点を磨くことが総合科学部生としての自分を高められると考えました。私がゼミに期待することは、前述したとおり、研究を通して自分の総合的な観点を高めることです。また、地域の食文化に関わる研究をし、地域の郷土料理を生かした町おこしをしたいと考えています。

→総合的に見る癖はつけてもらいます。が、矛盾することかもしれませんが、まずは何かひとつ焦点を定めて（＝専門分野・研究方法）見る癖をつけましょう。ある分野・理論・方法論は（つまり学問的な知識やスキルは）道具のようなものです。それぞれの道具がどのように使えるものなのか理解していきましょう。まずは、ひとつの道具は使えるようにする。

24)

私は、高校時代にジビエであるいのししの肉を食べた事があり、その味のおいしさに感銘をうけた。それから猟について興味がわき、このような経験をしたいと思い、この学部に入學した。猟師の高齢化や担い手が減少していくにも関わらず、猟の仕事は決して機械には出来ないものであると思う。将来町のために使える技術を学生

のうちに学んでおきたいと思い、このクラスを選択した。食な観点から物事を考える内容なので、ジビエやそば米などの地元の食材を知ると同時に、興味のある野草についても勉強できればいいと思っている。

→ジビエ経験、いいですね！後期は猟期なので、シカやイノシシを食べましょう！過疎地域では鳥獣害問題は深刻ですし、ハンターの減少も問題です。ちょうどいま全国的に、野生動物マネジメントをする新たなアクターを模索しています。いままでの猟友会や、それに国が補助金をつけるといった対策だけでなく、市場セクターや市民セクターが関与する可能性も各地で模索されています。ジビエの取り組みもそのひとつです。つまり、ジビエという食を通じて、日本における人-動物関係ないしは野生動物マネジメントの将来について考えることもできると思います。

25)

今回のお話で食がいかに関文化とつながっており、「食べる」という日常的行為を多面的視点で考えることで異文化理解にもつながることが分かった。内藤先生のゼミでは「食」というキーワードを通して自分で課題を設定し、フィールドワークを通して現状を把握し、具体的な解決方法を考える。私は卒業後、教員採用試験を受けるか一般企業に就職するかまだ決めかねているが、どちらにせよこの課題を発見し自分で解決していくためのプロセスは社会人として必要なスキルであると考えた。また、フィールドワークをすることで実際に見て、聞いて、触れることでそこで生活する人の暮らしを体感し、正確な情報を得ることができる。総合科学部ならではの「多面的に検討する」ということも十分活かせる。以上のことから私は内藤先生のゼミを希望したい。

質問：授業時間外の詳細日程はいつ頃把握できるのでしょうか。

→食というキーワード・お題を通すことで、かえって社会や文化について見えてくる部分もあると思います。なぜなら人間の社会や文化は広く深いからです。教員になるにせよ企業人になるにせよ、ある具体的なテーマに即して、さまざまな情報をたたく・検討するスキルは役にたつと思います。それが大学で学ぶことだと思いますが、課題発見ゼミはその入り口です。

授業時間外の詳細日程は、ゼミ所属が決まってから調整します。7月末か夏休み明けを予定。

26)

私は、国際教養コースに進みたいと考えており、食の観点から国際的社会問題の研究をしたいと思い、また様々な国の食文化に触れることで新しい異文化交流ができるのではと思います、第1希望にしました。

→私自身がアフリカ研究をしているからですが、異文化の研究に興味をもってくれる人がいて嬉しいです。私自身はアフリカの難民キャンプにおける食糧支援がもつ問題に焦点をあてた研究をしています。また、自分の文化は他人の異文化です。その違いが問題になることもありますし、その違いを楽しむことが観光や異文化交流なのだと思います。

27)

私は歴史や文化に興味があります。異文化について知りたいとおもっています。食といのは生きていく中でも重要な行為です。食にはその土地の文化などが現れます。国によって様々な違いがあり、それを学びたいです。

ゼミでは、食を通じて、色々な地域の文化、特徴を見つけたい。

→実際にアフリカの料理や郷土料理などを食べながら、食文化およびその活用について考えたり、食をめぐる社会問題について考えたいと思います。そのうえで、食をめぐる何らかの社会問題や実践に焦点をあてた研究を課題発見ゼミで試してみてください。

28)

私は、将来公務員として働くことを希望している。公務員ならば法学や政策学などを学ぶべきだが、私はそれだけでは足りないと思う。なぜなら机上の案と現地の状態は必ずしも一致するとは言えないからだ。

私は内藤クラスの「食を通して見る」というコンセプトが、実際のニーズを知るために必要なことに当てはまると考える。食という人の生存に欠かせないものには、嫌でも現地の文化や経済状況、環境などが反映されるからだ。

私はこのゼミを通して、本当に必要とされるニーズを見つける力を身に付けたい。

→1980年代のエチオピア大飢饉は天災というよりも、当時の政治的な問題をきっかけにした人災だという指摘があります（当時のエチオピア国内の食料は国民全員をまかなえなかったから）。食が、量も質も十分に、人びとに行き渡るためには、政治・社会・経済・文化・環境的な要因が複雑に絡み合っています。それをときほぐすために、さまざまな事例や理論を学ぶことは良いと思います。

29)

私は2年次から地域創生コースに所属したいと考えている。また、文化人類学に興味を持っていたので食というテーマから地域の自然や文化を学んでいきたい。それに私は徳島県出身なので郷土料理について学習し、徳島県の特産物にも焦点をあてて研究をしていきたい。

→地域創生コースによろこ。また、文化人類学に関心を持ってくれてありがとう。誰かの自文化は別の誰かの異文化です。それは問題を起こすこともありますが、文化の違いを資源や楽しみに変えたものが観光や特産品といったものだと思います。身近なものから、現代社会における文化をめぐる問題や可能性について考えてみましょう。

複数を選択

+ 葭森

わたしは内藤教授や葭森教授のもとでフィールドワークを重視した実践的な活動をしたい。積極的に行動することが苦手で今までも課外活動に参加したことが少ない。そのために、自分のコミュニケーション能力が極めて低いと感じることが多く、その度に何かしなければいけないとは思っていたが実際に行動に移すことができなかった。これらのことから、私は大学に入学してからは自分が少しでも興味を持ったことには参加しようと努めてきた。しかし、アルバイトや部活などで思ったほど時間がなく、参加したい活動にも参加できないことが多くなり、このままでは以前と何も変わらない生活を送って4年間を棒にふることになってしまいかねない。それゆえに、授業でフィールドワークを重視し、幅広い視野を身に付けることができる講義を受けたい。社会に出た後にどの仕事でも必要となってくる問題解決能力とコミュニケーション能力、また実際に現地へ赴き体験することで豊かな想像力を養うことができる。いずれも現在の私には不十分であり、ぜひこの機会に身につけたい。

→せっかく大学に入ったのだから、アルバイトばかりなんてもったいない。だって、その後の人生の多くを労働者として過ごすことになるのだから。ま、人それぞれですが、今回のテーマの「食」はみなさんにとってもとっつきの良い課題だと思います。ですが、食料援助、観光と地域づくり、フェアトレード、子ども食堂等々のさまざまな社会問題やその解決に向けた取り組みと結びついています。この機会に、自分の視野を広げてみましょう。

+ 衣川

食を通して自分の知らない世界の課題や真実を知ることが期待している。自分の将来に大いに役立つ気がしている。自分の中の当たり前をぶっこわしたい。また、第二候補としては、衣川先生のゼミ

→当たり前をぶっ壊すのは大いに結構！ただ、当たり前をぶっ壊すためには、まず、その当たり前が何なのか理解しておく必要があります。そうでないと「ぶっ壊す」対象が見つからない。ゼミでは今年は食という身近なテーマを通じて、みなさんの当たり前だどのように創られているのか把握した上で、それを「壊す」、「越える」、「やりすごす」方法を考えてみましょう。

+ 佐藤（健）

実地調査を行うことが出来る上、実際に行う調査法を実践的に学ぶことが出来ると思ったから。プレゼンテーションの能力も身に付けることが可能で、社会人に必要な力を得る糸口になる。また、将来は心理学を用いる仕事もしくは地域関連の仕事に就きたいと思っている。農作物を食べるから「害獣」と呼ばれている動物達とどの

ように上手く付き合っていくのか・動物達が「害獣」と呼ばれないようにするにはどのようにしたらいいのかを知ることが出来たら良いなと考えている。(人間も農作物を食べられて困っているが、相手は山に食料がなく死活問題だから)

→現実の社会問題が具体的にどのような問題だと当事者や社会に認識されているか、どのような要素から成り立っているか理解することができて、はじめて有効な「対策」を検討することができます。私たちは「文系」ですが、ある社会問題が、実はどのような要素から成り立っているのか知ることができます。そうやって問題を「見える化」することで、社会問題の解決に資する有効なアドバイスができるようになることもあります。問題は文系か理系かということでは無く、ある社会問題があり、それをどのように解決すれば良いのかということなのですから。

十三浦

私は今回の話を聞いて、内藤先生か三浦先生の授業に関心を持ち選択したいと考えた。まず、内藤先生だが食を通してみるということで私たちが生きていく上で必要不可欠な食事を改めて考える機会になると考えたからだ。大学に入って一人暮らしを始めてから自炊をしなければならなくなった。自炊をし始めて生き物のありがたみを直に知った。母親が食事を作ってくれていたこともどれほど幸せだったのかを知り、母親の味や、和食や洋食などの文化的な食事にも興味を持つようになった。また、一人暮らしでは孤食になりがちである。家族みんなで食べるのと一人で食べるのではたくさんの人と食を分かち合い一緒に食べることの方が大事である。高齢者や、小さな子どもたちが孤食で過ごすことのないように努めて行かなければならない。食の文化や宗教、食のあり方をこの授業で考えたい。

二つ目は、三浦先生の授業である。三浦先生は、自分の体を知るということで実際に自分の体を測定することができるのがすごく興味を持った。また、実際にフィールドワークを行なって高齢者や小学生が健康に過ごせるための行動を起こせることができるので一緒に活動したい。高齢化が進み、若者の室外遊びが減った今、それぞれが健康に生き生きと暮らすためには何が必要なのかを学び自分にも応用していけることを期待する。

→食というテーマは、自分にとって身近なものであると同時に、アフリカ・アジア・欧米・中南米等のいわゆる異文化に属する人々の異なる文化でもあります。今回はテーマ別のグループワーク方式を採用するので、食を通して孤立・障害・人道支援・流通・地域づくり・観光・食文化等々、自分たちの興味のある問題について考えるきっかけにしてもらえればと思います。

十真弓

社会科学とは、一つの事実に対して異なる合理的な結論があるか。しかし、これは事実が間違いない限りことである。存在しない事実の上で、正しい結論を得られない。統計学とフィールドワークは社会科学に対して事実の正しさを証明する方法だと思う。そのために、このクラスを選択した。

→統計を通じてマクロ的に社会現象を見るのも良いですし、変数化しにくい現象(人間の苦悩、さまざまな価値観、楽しみ等々)について考えるのも良いと思います。量的調査と質的調査は相互補完的です。私のほうは、どちらかといえば質的調査(変数化しにくい現象)の方ですが、当然ながら量的な調査も組み合わせます。

十吉田

- ・私は以前からヨーロッパの歴史や、都市の形成の歴史的背景を勉強したいと思っているから。
- ・歴史を踏まえていろいろなところについてみたいから。
- ・自分の興味関心を反映できるゼミであると思ったから。
- ・災害がおきた時に行政任せではない自分たち主体の防災活動を学びたいから。
- ・地域がかかえるもんだいを理解し、支援をしていきたいから。
- ・ボランティア活動がしたいから。

→今回は防災では無く、食をテーマにしました。食を通じて災害を見てみれば良いと思います。グループワーク中心なので、自分たちの関心があるテーマごとにグループを組織して、深めていってください。こういったテー

マを選んでも、それを社会的に何らかの価値がある課題に高めて、データを収集・検討して、発表・議論できるようになることが、このゼミの課題です。ヨーロッパの歴史や都市形成の話に関心がある人は、それを「食」という切り口を通じて見たら良いと思います（たとえば砂糖・お茶・コーヒーとカフェの世界史は、ヨーロッパはもちろんですが、アフリカにも深く関わってきて面白い）。

私は吉田先生のゼミと内藤先生のゼミのどちらかに入りたいと考えている。どちらのゼミにも関連していることは、地域おこしに関係していることと、フィールドワークやイベントのデザインなどの実際にやってみるといえるところだ。私は2年のコース選択では地域創生コースに入りたいと思っているので、課題発見ゼミでも地域系のことがやりたいのだ。また、このゼミで新しい地域おこしのアイデアを学べるかもしれないので、このどちらかのゼミに入りたいのである。

→イベントのデザインということでは、今回は希望者については旅行会社とコラボして、徳島県西部を対象に実際にグリーンツーリズムの観光商品をつくり、それを販売してもらい、フィードバックを得るというプロジェクトをおこないます。観光は良くも悪くも過疎地域における活性化の切り札として注目されています。また、「学生が頑張ったで賞」ではなく、実際に企業と連携して旅行商品を開発するという経験は、確かな知識や責任、コミュニケーションが必要です。また、社会が求めるスタンダードもわかると思います。

まず、吉田クラスでは徳島ファーマーズマーケットのデザインをすることで、イベントの企画能力を養うことができる。また、地域の農家や事業者の方と協力することで現在の地域が抱える問題点や可能性を知ることができる。そして協働・共創・協業の基礎を学ぶことによってグループで物事を進めていく基礎を身につけることができる

内藤クラスでは、フィールドワークの方法を学ぶことができる。フィールドワークを現地で行い、めずらしい体験ができるということは魅力的である。また、フィールドワークの方法を学ぶことで、自分で色々な地域や国で調査ができるようになる。まだ自分が何を専門として学んでいくのかは決めていないが、何を専門とするにしてもフィールドワークができるに越したことはない。

いずれにしても、グループで共同する能力を身に付けたい。

→今回は、「食」を通して、自分たちの関心がある問題について調べ、考えてみようというコンセプトです。そのうちの1つが、企業とコラボした旅行商品の開発です。観光のなかで食は重要な要素ですから。また、そこからジビエを観光資源化できないかということについても調べるグループを作ろうと思っています。そうではなくて、純粋に食文化に関心がある人は、そのまま食文化を追求するのもとても良いことだと思います。

私が吉田先生のクラスを選んだのは、まちづくりに興味があり国内のものについては本を読み知ることができましたが、海外のものについては知識が少なく、このクラスで取り上げられるアメリカオレゴン州ポートランドのまちづくりについて知りたいと考えたからです。このクラスでは日本国内の知識で止まっている私を、海外のことをより知りたいと思えるようにしてくれることを期待しています。

内藤先生のクラスを選んだのはフィールドワークを取り入れた授業を行うと説明していたからです。フィールドワークの講義は受けているが知識だけで実際にしたことではない。そこで学んだことを生かせるクラスであることが良いと考えました。

→フィールドワークは単に現地に行くものではありません。今回は食を通して見るということなので、それを通して観光・地域づくり・社会的排除/包摂・人道支援や開発援助、フェアトレード等々について考える際、必要なデータを収集するためにフィールドワークをするのです。とくに今回は、少なくとも一グループでは、徳島県西部を対象にしたグリーンツーリズム型の観光商品開発を、実際の旅行会社とおこない、商品として販売するところまでします。その場合は、食をテーマにした観光によるある地域の活性化をするために、必要な情報をとるためにフィールドワークに行くのです。逆に言えば、フィールドに行かなくても必要なデータが入手できる場合は、行く必要は無いのです。私はフィールドワーク至上主義者でもありません。とはいえ、楽しいものなどは、もちろん思っています。

+ 葭森+上原

A (葭森), J (内藤) を選んだ理由等

フィールドワークについて興味があり、かつ自分の足で情報を収集するという経験はぜひするべきだと考えたから。また、自分の常識外のことを体験し、自分の視野を広げたいと考えたから。常識外のことはもちろん、普段何気ないことでも、それらの裏理由には何があるのかを学習できることを期待したい。

C (上原クラス) を選んだ理由等

私はプレゼン能力があまりないと自負しており、まだプレゼン能力は社会に出るときに必須な能力であるので、是非とも身に着けるべきだと考えたから。また徳島の変った光景について、ここにきてまだ数か月ということもあるので、どのようなものがあるのか知りたいから。この授業によって、徳島の変ったものについて知ることやプレゼンの基本的なやり方はもちろん、分かりやすいプレゼンのやり方、人を引き付けるプレゼンのやり方等を身に着けたい。"

→フィールドワークに関心を持ってくれてありがとう。たしかに「足」を使います。また、人類学のフィールドワークでは、視覚と聴覚だけでなく五感 (+触覚・嗅覚・味覚) を働かせなさいとよく言われます。「食」のフィールドワークは5感を働かせるにはいいテーマだと思います。とはいえ、足を使い、五感をフル稼働させる価値のあるデータを集める研究課題を設定する必要があります。食は入り口であって、具体的な研究課題はみなさんに決めてもらいます。もちろん研究課題を立案するプロセスが、課題発見ゼミにおける重要な教育プロセスです。そしてそれを分析し、何らかの理解に到達したら、それをプレゼンする訓練をします。このプレゼンもアカデミックなものから、企業向けのものまで、TPOによってさまざまです。今回はいちグループは企業とコラボするので、企業向け、他のグループはアカデミックなものという感じで分けることができるだろうと思っています。

質問：内藤先生の授業は、防災についても触れるのでしょうか？シラバスには防災について載っていたのに説明では防災について特に触れられていませんでしたので気になりました。

→大テーマを食としました。食を「通じて」、好きな社会・文化的な現象を切り取ってください。当然ながら、食を通じて災害・防災について考えることは十分に可能だと思います。ありきたりな、防災大事ですね、コミュニティ大事ですねというのでは無く、ではその災害コミュニティを実効的なものにするためにはどうすればいいのか？いつ来るともしれない災害に備え続ける実効的な組織・制度をつくるためにはどうすればいいのか？現場で問題になっていることは、そういうことです。

+ 葭森+三浦

私は、自分で行動に移すことが苦手なので、フィールドワークや実践がある授業を通して自分の行動力や決断力を養いたいからだ。そのためにも、学べることが多いフィールドワークがあることを期待したい。

→フィールドで聞き取り調査をする場合、その瞬間に頼れるのはあなたひとりです。プレゼンの場にたっているときに、その瞬間に頼れるのはあなたひとりです。もちろん、そのための準備は仲間や教員とするかもしれませんが、こうした経験を積んで、自分で責任を持って、考え、行動できるようになることを期待しています。

+ 葭森+吉田

私は、後期の課題発見ゼミナールで履修したいと考えているクラスが3つある。はっきりとは決まっていないものの、私は将来市役所や町役場に就職して地域が抱えている課題を発見し、住民の意向に沿う形で課題解決に取り組んでみたいと考えている。将来仕事する上で必要となる力を身につけるのにふさわしいものとして3つのクラスを考えている。

1 つ目が、内藤先生のクラスである。今回の授業では「食」について取り上げるということだ。各人の興味・関心に合わせて食がもたらす豊かさや食が抱える問題について考え、実際に地域に赴き、体験することでさらに理解を深めることができる。フィールドワークで多くの人と交流することでコミュニケーション能力の必要性にも気づける。将来必要となる課題発見能力・コミュニケーション能力を身につけるきっかけとなるのでこの授業を履修したいと考える。

2 つ目が、葭森先生のクラスである。この授業では徳島に焦点を当て、何気なく過ごす日常の風景から不思議

だ、面白いと感じるものを見つけ、調査し、資料を集め、考察するということだ。地元徳島で仕事をしたいと考える私にとって、徳島について知ることは最も重要である。調査では、文献を使って調べるだけでなく、近隣の住人や役所の人に聞いてみるなどより多くの手法で調査をしていきたい。

3つ目が、吉田先生のクラスである。この授業では学生ショップ「やおや YaO-Ya」を運営し、ローカル野菜の仕入れと販売を体験するということだ。一連の流れを通して問題を発見し、自分で考えて行動することはどんな職業においても必要となってくるはずだ。社会人としての基礎力を身につけるためにこの授業を履修したいと考える。

→今回、「食」をテーマにしたのは、まさに自分で「課題」を発見することが、このゼミの目的だからです。食というフィルターを通じて人間の社会や文化を見直したときに、あなたに関心を持つ物事を研究の「課題」にする方法を学びます。そのうえで、それぞれの課題解決のためのデータ収集・分析・考察・成果公開の方法を実践的に学んでください。また、成果公開はアカデミックなスタイルに限りません。企業と連携して具体的な旅行商品を開発するという形で社会に公開する形もあり得ます。どちらにするかは、あなたが決めてください。

+熊坂・佐藤・山口+吉田

私が、後期の課題発見ゼミで選択したいゼミは、現地点では3つ(仮)ある。

・一つ目は、熊坂、佐藤、山口クラスのゼミである。私は「異文化理解」に興味があり、多面的なものの見方を身に付けたいと考えているからだ。また、心理学的観点、倫理的観点から、障害について考えることができるだけでなく、プレゼンテーションの基礎や文献検索法が学べるという点がこのクラスの魅力であると考えられる。多面的なものの見方、プレゼンテーション能力は私に足りない力であり、身に付けるべき力であるからこのクラスを選択したいと考えている。

・二つ目は、内藤クラスのゼミである。ガイダンスで、「郷土料理や各国料理あるいはハラルフードのように集団のアイデンティティに深く関わっていることがある」という説明をうけたが、食を通じて世界を見るという方法も「異文化理解」のアプローチ方法としては有効であると私は考えた。なぜなら、単に「異文化」について学ぶのではなく「食」という日常的なものを通じて実際に体験することで、「異文化」についての理解がより深まるのではないかと考えたからだ。

・三つ目は、吉田クラスのゼミである。授業の中で私が特に身に付けるべき力は「ブレインストーミング」であるからだ。問題発見、課題解決のためには必要なスキルであり、日常生活でも(レポートの論じるべき点を見つけるときなどに)「ブレインストーミング」は必要であると考えからである。

今回のゼミ選択にあたって、自分の興味で選ばずに、客観的に考えることは大切であることに気づいた。もし、単に自分の興味だけで選んでいたらここまで迷うこともなく簡単に決めているだろうと考えるからだ。冒頭で決まっているのは現地点では三つであると述べたが、自分が身に付けるべき力は何かと考えたら、実際は三つでは絞り切れていない。しかし、総て書ききれないため仮で三つに絞った。自分にとってどの授業が必要で、どのような力をつけるべきか考えなければならない。

→文化人類学は異文化研究を専門としていますが、それは同じ生物種であるにもかかわらず、集団ごとに行動にこれほどの多様性がある生物は他にいないからです。そのために、それぞれ異なる行動(文化・社会)を比較し、その多様な人間の特性やその可能性について考えるのが、人類学の究極の目的です。

あなたの自文化は、他人の異文化です。私たちは食をなくしては数日しか生存できないわけですが、その食べ物さえ、非常に多様です。他者の食文化に対する驚きは、TV番組や観光といった娯楽産業に繋がっています。また、人道支援における食料援助の量や質の問題や飢餓の発生に関する問題、あるいは先進国では肥満や摂食障害や孤食といった問題にも繋がっています。

食の入り口から、どこに向かっても良いので、自分の関心、課題を見つけて、深めてください。当然ながらグループワーク形式で研究課題を立案・実施し、分析・考察し、成果発表までおこないます。その過程では、グループのメンバーと徹底的に話し合う必要があるでしょう。

+衣川+趙

G (趙) 社会のしくみについて学びたいと思ったから。私は将来、公務員になりたいと考えているが、そのためにも必要であるし、一般教養としても重要であると思う。

I (衣川) 文系の学部にいるからには言葉の意味や歴史背景などをもっと突き詰めたいと思ったからだ。高校時代、日本史や国語の授業は好きだったので、もっと日本史や国語に詳しく触れたい。

J (内藤) 他の大学では出来ないことだと思ったから。私は大学では新しいことをしてみたいと思っていたので、狩猟をするという授業はとても魅力だ。地域の人とも関わりを持てるのもいい。

→実際に狩猟の現場を体験する(行きたければ)とか、旅行会社とコラボして実際の旅行商品をつくるといったことは、近大には負けるでしょうが、なかなかユニークで、うちのゼミ生も就活の時どこに出しても珍しがられます。

+三浦+眞弓

私は3つのゼミに興味があり、その中のどれかを受講したいと考えている。

1 つ目は内藤先生のクラスである。このクラスでは食についての課題を研究する。なかでも私は子ども食堂に特に興味がある。私は高校3年生の時に初めて子ども食堂というものの存在を知った。それ以来、ボランティアなどでこの取り組みに携わりたいと考えていた。子ども食堂のことを知った時にとても良い取り組みだと感じた。しかし実際に活動していく中で問題が出てきていないか、あるのであればそれをどうやって解決するかということを実際に自分で見聞きして考えたい。また、食堂の利用者に感想を聞いてみたいとも何考えている。

2 つ目は眞弓先生のクラスである。これを候補に挙げたのは、統計の勉強もしたいと考えているからである。私は数学的な考え方が好きだ。大学でできれば統計の勉強もしたいと考えていた。また総合科学部ではなかなか数学的な授業がないため、この授業は論理的な思考を身につけられる貴重な機会である。

3 つ目は三浦先生のクラスである。私は人の身体機能にも興味がある。また私の地元は人口に占める高齢者の割合が高く、スポーツを通じた高齢者の健康づくりについて学ぶことができれば、将来地元に戻った時に役立てることができそうだ。

まだどのゼミを第一希望にするかは決めていない。ゼミを通じて自分が身につけるべき力は何なのかということをしつくり考えて決めようと思う。

→「子ども食堂」については、ゼミの3年生が関心を持っていて、研究を深めようとしています。とても喜ぶと思います。子ども食堂やフードバンクといった支援活動に興味をもつ人たちが1グループ構成できればと考えています。食を通じて日本における(貧者や障害者の)排除の問題やその解決に向けた取り組みについて考えることができればと思います。

+葭森+上原+吉田

A (葭森) :自分が小学生の頃から育った徳島について知りたいから。私は大学に入って徳島のことを聞かれる機会が多くなったが、きちんと答えることができない。この機会に徳島の魅力を堪能したいから。

F (上原) :裁判を傍聴したい気持ちが小さい頃からあり、裁判を傍聴することは今の徳島で何が起きているのかも知ることが出来る。このような体験は他ではあまり出来ないし、絶対に自分のためになり、良い経験であるから。

H (吉田) :私は去年徳島大学のファーマーズマーケットに行った。地域と蜜となれるこの活動は素晴らしいと思った。来年もし徳島大学に行けてたら参加したいなと受験生ながら考えていた。このクラスに行くことで高校の時からファーマーズマーケットに参加したいという小さな願望を実現出来るから。さらに、日本だけでなく、アメリカのまちづくりを知れて、視野が広くなれそうだから。

J (内藤) :南海トラフ大地震は向こう 30 年以内に約 70 パーセント起こると言われている。(http://www.jishin.go.jp/main/yosokuchizu/kaiko/k_nankai.htm 6月11日アクセス)生きている間に起こる可能性の高い地震についてきちんと知りたいから。高校の時とは違う実践的な防災活動を学びたいから。

→シラバスに防災と書きましたが、当日は明らかに防災では無い、食を通じた社会・文化の理解と実践をテーマにしようと言いましたが、聞いていましたか？